

Interchange について

薬学部 薬学科 1年

Interchange とはハワイ大学の学生たちがクラスにきて彼らと交流ができる時間で、彼らと交流し様々な質問ができる貴重な時間となっている。私が受講したクラスでは、クラスメート3人とハワイ大学の学生1人で合計3回 Interchange を行った。それぞれの Interchange の時間内ではなるべく違う学生とグループになるように設定されているので、いろんな人と話すこともでき、日本やハワイ以外の国についても知ることができた。私が受講したクラスでは、準備やフィードバックも含めて、主に以下のような流れで行った。私たちは、初日に配布された教科書を使い質問内容を授業内で確認した。例えば、分からない単語があるか、言い換えできるものは何と言うか、ハワイ語についてなどを確認した。確認した後に、質問に対する自分の回答をまとめ、グループメンバーと共有した。その後にグループに分かれてハワイ大学の学生に用意した質問をし、その後、いっしょに会話を楽しんだ。次の日にクラスメンバーとどのような回答が出たのかを共有した。

1回目の Interchange は、オリエンテーションが行われた次の日にあり、自己紹介を兼ねて出身地や年齢、家族構成、好きなものや趣味、大学での専攻、日本への訪問経験や好きな日本の文化といった日本に関しての質問をした。私のグループのハワイ大学の学生は、海洋生物学について学んでいて、そのせいか趣味は釣りで、鮭を釣ったことがあるとのことだった。他の趣味は、Switch で「マリオカート」や「あつまれどうぶつの森」などをすると話してくれた。



↑ 1回目の Interchange のメンバーで
撮った写真

2回目は、Interchange に来た学生に食べ物に関しての質問をした。例えば、お気に入りのお食べ物や、今まで食べたなかで一番価格の高かったもの、奇妙な食べ物などを質問した。好きな食べ物はステーキで、おすすめの食べ物はパンダエクスプレス(中華料理のチェーン店)で、奇妙な食べ物はポイ(Poi)だと教えてくれた。ポイはハワイの伝統的な食べ物だが、見た目が紫色であり美味しくはないと言っていた。また、日本の奇妙な食べ物としてよく納豆があげられるけど、見た目はねばねばしていて少し嫌だけど嫌いではないと言っていた。

3回目の Interchange では、出身がハワイではない学生だったため、ハワイに関する質問した。例えば、はじめてハワイに来たときの印象やハワイの景色、天気、人などに対してどのように感じたかなどを質問した。ハワイに初めて来たときはまだ小さかったため英

語が話せなくて不安だったけど周りの人がいい人ばかりで楽しく過ごすことができたと言っていた。また、温かくビーチもたくさんあって楽しい場所だとも言っていた。用意してあった質問が終わり、時間が余ってしまったので、残りの時間は自分達がしたい質問をするなどして会話を楽しんだ。例えば、出身地や彼氏がいるということだったので彼氏について聞いたり、日本のことなど、いろんなことを質問することができた。日本のアニメや食べ物が好きで何回か訪れたことがあると話してくれた。

3回目の Interchange が終わった後に近くにいた同じクラスの人たちみんなが集まって、ハワイ大学の学生がウクレレを弾きながら歌ってくれた。その後みんなで写真を撮るなど最後はみんなで見えながら別れるなど短い時間だったけど楽しい時間をたくさん過ごすことができた。

私は授業内で質問を一度みんなで確認しあう時間があることで、テキストに書かれている質問以外にも考える時間を作れた。そのため、短い時間でたくさん質問しいろんなことが知れて良かった。

最初はネイティブスピーカーの英語を聞き取れるか不安だったが、聞き取りやすいようにスピードを調節して話してくれたり、写真を見せながら話をしてくれたり工夫してくれていたのも理解しやすく楽しい時間が過ごせた。また、分からないときはお互いに助け合うなど、良い学びができた。そのため、薬学部の課題で現地の薬剤師と会話をする際にも、相手の英語を聞き取って理解できることが多くなったと実感できた。今後は自分が話したいことを英語でスムーズに、そして積極的に話せるように今回の経験を生かして英語を学習していきたいと思う。



↑ Interchanger の Alex と最後にみんなで撮った写真

Straub Medical Center 見学について

薬学部 薬学科 2 年

1. はじめに

私たちは3月18日にStraub Medical Centerを訪問した。Straub Medical Centerは太平洋地域で唯一の多職種連携による熱傷治療センターを有する病院である。本報告書では、病院見学で学んだ内容や印象に残った点、さらに今回の経験を通して得た自身の学びと今後について述べる。

2. 見学した場所

(1) 熱傷病棟

3階は熱傷病棟と心臓手術関連のエリアに分かれていた。今回は、主に熱傷病棟を見学した。熱傷病棟には特別な病室があり、皮膚への負担を軽減するために室温と湿度が高く保たれていた。熱傷患者は皮膚が損傷しているため感染症のリスクが高く、病棟には特別な消毒システムが導入されていた。ここでの薬剤師の役割は、鎮痛薬の管理や患者の不安を軽減する薬の提供などであった。また、熱傷病棟では火傷患者だけでなく、化学薬品による損傷や重度の感染を伴う患者も治療を受けていた。



(2) ICU

ICUでは、薬剤師が患者の治療に深く関わっていた。具体的には、急変時に使用する鎮静薬の管理や、血圧管理薬が適正であるかの確認を行っていた。また、患者が見やすいようにテレビがベッドサイドではなく天井に設置されていた点も印象的であった。ICUには大きい部屋と小さい部屋が存在していたが、厳密に用途が分かれているわけではなかった。しかし、心臓カテーテルを使用する患者が多い心疾患系と、ECMO等を使用する肺疾患系である程度分かれていた。



(3) 経過観察室

経過観察室は比較的新しく設置された部屋であり、入院が必要なほど重症ではない患者の待機スペースとして利用されていた。入院患者が増えると病棟のベッドが

不足してしまうため、病床を効率よく活用する工夫として設けられていた。患者の状態を観察しながら、必要に応じて入院へ移行できる点が特徴であると感じた。

(4) 外来薬局

外来薬局では音楽が流れていた。医師から薬局へ事前に薬のオーダーが送られる仕組みとなっていたため、患者が薬局に来る前に薬を準備することができ、待ち時間の短縮につながっていた。また、薬の保管棚には劇薬には劇薬を示すマークが表示されており、患者ごとや曜日ごとに薬を分けて管理するなど、医療ミス防止の工夫も行われていた。



(5) 備品補充用の倉庫

この倉庫には、点滴などの薬剤をはじめ、包帯や救急セットなどの医療備品が保管されていた。救急セットは使用後に薬剤師が補充し、中身の最終チェックまで行っていた。薬剤管理は非常に厳重であり、指紋認証によって使用者を管理するシステムが導入されていた。さらに薬局がこの倉庫に隣接されているため、迅速に備品を補充できる環境が整えられていた。

(6) オフィスビル

病院の他にオフィスビルがあり、主に手術前の準備をする場所として使用されていた。薬剤師は手術前に服用してはいけない薬や絶食時間等について患者へ説明する役割を担っていた。また、オフィスビル内にはワルファリンのモニタリングを行う Coumadin(ワルファリン)Clinic があった。そこでは、INR を指標として血液凝固状態を確認しており、検査結果に基づいて薬剤を調整することも薬剤師の役割であった。

説明して下さった薬剤師の方によると、アメリカでは近年、薬剤師主導の医療が広がってきており、予防接種や一部の処方箋発行に関わることができるという。また、薬学生も予防接種を行うことができるそう。日本では、薬剤師が患者に直接治療を行う機会は多くないため、日本との違いを強く感じた。さらに、アメリカでは粉薬が主流ではなく、分包機もほとんど使用されていないため、錠剤で処方されることが一般的であることも学んだ。

(7) その他

その他にも様々な設備を見ることができた。病院内には薬を運搬するロボットが導入されており、業務効率化が図られていた(写真1)。また、白衣を管理する機械もあり、使用後の白衣を返却すると新しい白衣を受け取れる仕組みとなっていた。個人専用の白衣を持つのではなく、共通管理されている点が特徴的であった(写真

2)。食事については、患者自身が食べたいものを選択できるシステムが導入されていた(写真3)。一方で、食事が制限されている患者にはオレンジ色のコーンを設置することで注意喚起が行われていた(写真4)。さらに、病院内にはGPSシステムがあり、医療スタッフの位置を把握できるようになっていた。病院入口には金属探知機も設置されており、銃器の持ち込みを防ぐなど、安全対策も徹底されていた。

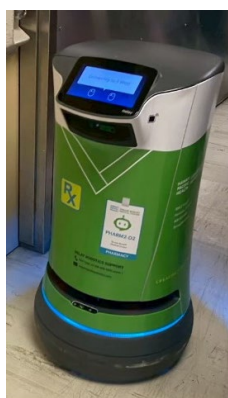


写真1



写真2



写真3



写真4

3. 自身の学びと今後へ向けて

今回の見学を通して日本とアメリカの薬剤師の役割の違いを強く実感した。アメリカの薬剤師は単に薬を調剤するだけではなく、ICU や病棟で他職種と連携しながら患者の治療方針に深く関わっていた。また、予防接種や薬剤管理など、臨床現場で幅広い役割を担っていることが非常に印象的であった。特に、医師不足や医療従事者の業務負担を補うために、薬剤師が積極的に医療へ関わっている点に驚いた。

今後、日本でも高齢化の進行に伴い、薬剤師に求められる役割はさらに拡大していくと考えられる。そのため、薬学的知識を身に着けるだけでなく、実習やグループワークなどを通して患者や他職種と円滑に連携するためのコミュニケーション能力も高めていきたい。そして、患者一人ひとりに寄り添いながらチーム医療に貢献できる薬剤師を目指したい。

以 上

Intermediate Class について

薬学部 薬学科 1 年

私は、2 週間の Nice Program の授業を通して、英語力の向上だけでなく、ハワイの歴史や文化についても学ぶことができた。

初日にオーラルテストを受け、その結果をもとにクラス分けが行われた。私が所属したクラスの担当は Kaan 先生で、日本人学生 13 名とともに授業を受けた。授業では、事前に選んだ 3 枚の写真を用いたプレゼンテーションを 2 回行った。1 回目は、日本での生活、2 回目はハワイでの経験をテーマに発表し、自分の考えや体験を英語で伝える機会となった。

また、クイズ形式でハワイの歴史や食文化、地理、ハワイ語、観光地などについて学ぶ機会が多くあり、楽しみながら知識を深めることができた。例えば、ワイキキの主要な通りの名前がハワイ王国 アメリカンフットボールの様子 の歴史や偉人の名前に由来していることを知り、日常生活で目にするものにも



歴史的背景があることに気づいた。

Off Campus Activity では、ワイキキビーチ周辺を歩きながら歴史上の重要な人物の像を巡り、先生の説明を聞くことで、教室内では得られない実践的な学びを得ることができた。それぞれの人物

がハワイの歴史にどのように関わってきたのかを知ることで、独自の歴史や文化をもつハワイへの理解がより一層深まったと感じている。また、アメリカンフットボールを体験し



たり、昼食には Kaan 先生おすすめのレストランを訪れて、Loco moco を食べたりと、ハワイの文化を体験する機会にもなった。

初回の授業は、不安と緊張から積極的に発言することができず、英語でのコミュニケーションに難しさを感じていた。しかし、フレンドリーな Kaan 先生やクラスメイトの存在により、徐々に安心して発言できるようになり、自分の中の意識も大きく変化した。

プレゼンテーションにおいても、自分の成長を感じることができた。原稿を見ながら発表することが禁止されていたため、最初のプレゼンテーションでは、事前に考えていた文章を思い出しながら話すことに精一杯だった。しかし、2回目のプレゼンテーションでは、完璧な英語でなくても自分の言葉で話

Off Campus Activity の様子 すことを意識し、聞き手の反応を見ながら発表することができた。

2週間という短い期間ではあったが、多くの出会いや経験を通して、自分自身の成長を感じることができ、非常に充実した時間を過ごすことができた。今

後はこの経験を活かし、英語のコミュニケーションスキルをさらに向上させて
いきたい。

Hula workshop について

薬学部薬学科 1 年

1. 概要

日時：2026 年 3 月 17 日 10 時 30 分～12 時 20 分

場所：University Laboratory School Multipurpose Building



2. ワークショップの流れ

当日は各クラス約 1 時間ほど授業を行った後、合同でフラの授業を行った。会場は、大学のすぐ近くにある University Laboratory School の体育館のような場所で、講師である「Kumu Kela」からフラを教わった。Kumu というのは、ハワイ語で先生という意味である。フラのダンスの動作には一つひとつ意味があり、その動作をハワイ語とともに教わった。

「E Huli Mākou」という曲で踊り、列ごとに向かい合わせになってフォーメーションを組んで踊ったりもした。ワークショップの最後には数人ずつで踊りのテストも行った。何度も練習し、休憩時間もみんなで振付を確認したので全員が踊りきることが出来た。

3. フラについて

ワークショップではただ踊りを教えてもらうのではなく、簡単ではあるがフラの歴史や踊りの意味についても一緒に学んだ。

フラ (Hula) は、ハワイに古くから伝わる詩 (mele) や詠唱 (oli) に合わせて踊る伝統的な舞踊である。日本では「フラダンス」と呼ばれることが多いが、ハワイでは基本的に「フラ (Hula)」と呼ばれる。フラは単なるダンスではなく、ハワイの歴史や神話、自然、土地、人々の思いなどを、歌と身体の動きによって伝える文化として継承されてきた。特に、文字を持たなかった古代ハワイでは、歌や踊りによって歴史や伝説を後世に伝える役割も果たしていた。古代のフラには、現在のような華やかな観光向けの踊りとは異なるものも多く、神々への祈りや、土地・自然への敬意、重要な人物や出来事をたたえることなどが目的だった。踊り手は、手や腕、腰などの動きを使って、歌の内容を表現した。例えば、「波や海 → 手を波のように動かす」「花 → 指をすばめてつぼみを表現する」「雨 → 指をパラパラさせながら上げた手を下ろし雨が降る様子を表す」「愛情 → 伸ばした手を胸の前でクロスさせ相手を思う気持ちを表す」というように、身体の動きそのものが言葉のような役割を持っている。



19 世紀になると、ハワイにキリスト教の宣教師が訪れるようになった。当時の宣教師たちは、フラをハワイの宗教や文化と結びつけた非文明的で好ましくないものと捉えた。その影響で、1830 年頃には禁止令によりフラが制限され、公共の場で踊ることが難しくなっ

た時期があった。その結果、フラの伝統は大きな危機にさらされた。しかし、フラが完全になくなったわけではなく、ハワイの人々は、家庭など限られた場所で文化を受け継ぎ続けた。フラの歴史で特に重要なのが、1874年に即位したカラーカウア王（David Kalākaua）です。カラーカウア王は、ハワイの伝統文化を大切にし、ハワイの言語や音楽、フラなどの文化を復興させようとした。この時期にフラは再び公の場で行われるようになり、ハワイの文化として世界に広まっていくこととなった。

4. 感じたこと

私はこのフラワークショップを楽しみにしていた。もともと踊ることが好きな私は、フラダンスは今まで経験したことがなかったため、どのような踊りなのか、実際に踊ることを心待ちにしていた。ワークショップで踊りを習う前のフラダンスのイメージは、きれいで優雅な踊りで、腰を振りながら腕を波のように動かす振り付けというものだった。しかし、実際にフラを習ってみると、それぞれの動きに意味があり、踊り自体に伝えたいメッセージがあるのだと学んだ。動きは繊細で上手に踊るのは思っていたよりも難しいと感じた。また、必要なハワイ語も同時に教えてもらったが、似ている言葉があり、私にとっては踊りを覚えるよりもハワイ語を覚えることの方が難しく、多少混乱してしまった。

フラにはハワイの自然や文化、歴史を伝える役割があり、文字だけではなく歌や踊りによって文化を受け継いできたことを知った。実際にワークショップで動きを教えてもらったことで、フラがハワイの人々にとって大切な文化であることをより実感することができた。

5. この活動を通して

今回のフラのワークショップを通して、実際に自分が体験しながらハワイの文化や伝統に触れることが出来た。異文化を理解するためには、知識として学ぶだけでなく、実際にその文化を体験することが大切だと感じた。フラは単なるダンスではなく、ハワイの歴史や自然、人々の思いを伝える大切な文化であることを知り、実際に踊ってみたことで、フラがハワイの人々にとってどのような意味を持つのかをより身近に感じる事ができた。また、ハワイの文化を知ったことで、自分が普段生活している日本にも、長い歴史の中で受け継がれてきたさまざまな伝統文化があることに改めて気づかされた。今後は海外の文化に触れる際にも、ただ見るだけでなく、実際に体験したり、現地の人と交流したりすることを大切にしたい。そして、今回の経験をきっかけに、自分の身近な日本の文化についても興味を持ち、異なる文化を尊重する姿勢を身につけていきたい。

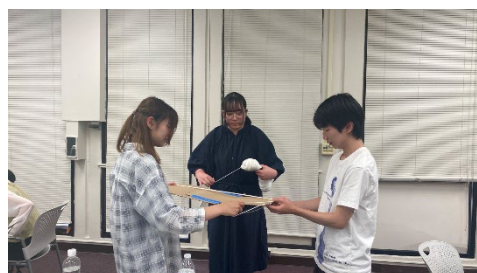


High Basic Class について

薬学部 薬学科 2年

私は High Basic Class を受講した。このクラスの担任は Amie 先生で、明るくとてもフレンドリーな先生だった。私は英語が苦手で、英語の授業についていけるか不安だったが、初日のオーラルテストで自分の英語力に合ったクラスで授業を受けることができたため、楽しく英語を学びながら有意義に授業を受けることができた。先生もわかりやすい英語を使ってくれて、ジェスチャーしながら話してくれたり、分からない単語は説明してくれたりした。

High Basic Class は日本人 15 人のクラスで、授業は 3~4 人のグループに分かれて行われていた。授業では、ハワイ大学の学生と会話するインターチェンジで行う Q&A の答えを考えてグループで共有したり、グループごとに前に出てロールプレイをしたり、ビンゴをしたりした。その中で、ハワイの食べ物や植物、ハワイ語などのハワイの文化を学び、ハワイの伝統的な首飾りで、誕生日や卒業式で贈られる「レイ」を作ったりもした。レイと言えば花などを糸で繋げたものを想像する人が多いと思うが、今回は 11 本の毛糸を段ボールの板に巻きつけて同じ長さに切り、それを三つ編みして作った。作ったレイは最終日に行う卒業式につけていった。



レイを作っている様子



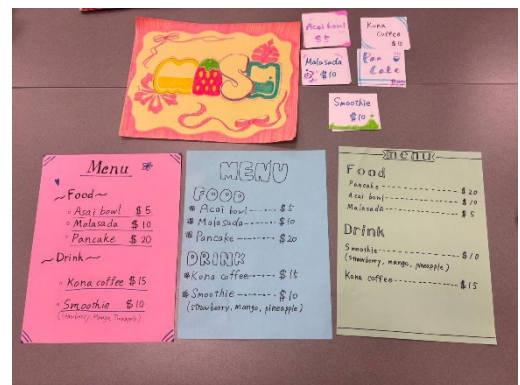
完成したレイ

また、宿題として、自分が食べたご飯を英語で紹介する「もっぱん動画」を撮る課題や、大学外の人とスモールトークをしようという課題が出て、英語で話す機会をたくさん与えてくれた。授業の中でも英語で質問し合ったり、ゲーム感覚で英語を楽しく話せるような工夫をしてくれていることが多かった。

特に印象に残っている授業は、Off Campus Educational Activity とファイナルプレゼンテーションだ。Off Campus Educational Activity では、クラスでワイキキビーチ沿いにある QUEEN KAPI'OLANI 像や DUKE PAOA KAHANAMOKU 像、歴史的建造物でもある MOANA SURERIDER などの説明を受けながら歩いていき、グーグルフォームで像や建物に関する Q&A をやった。その後もう 1 つのクラスと一緒に、カピオラニ公園でアメリカンフットボールを楽しんだ。最初は小さいボールでキャッチボールの練習をして、その後本物のボールを使って練習した。その後、走りながらボールをキャッチする練習と、ディフェンスの練習をして一通りのプレーを学んでから、10 対 10 の試合形式をした。授業の中でハワイの文化を学んでいたが、実際に街中に出て像や建物を見ながら説明を受けたこ

とで、よりハワイについて知ることができた。また、アメリカンフットボールで体を動かしながら現地のスポーツに触れることができたのもとても貴重な経験になった。

ファイナルプレゼンテーションは、先生がプレゼンで固い授業をするより楽しく授業の方がいいという考えだったので、4人グループに分かれてのお店屋さんごっことなった。「お店屋さんごっこ」とは書いたが、まずレストランの名前を考え、3つのローカルフードと2つの飲み物、値段を決めて、レストランのロゴやメニューを作るなど本格的なロールプレイだった。さらに、店側と客側それぞれが使う英語のフレーズを考え、店側のときは席に案内したり、注文を取ったり、客側のときはメニューから選んで注文や支払いした。グループでどんなレストランにするのか考えてメニューを作ったりしたのがとても楽しかったし、実際にレストランに行ったときにどのようなことを聞かれて、どのように答えればいいのかを楽しく学ぶことができたのが良かった。最後の日には先生がギターを弾いてくれて、クラスみんなで「Aloha'Oe」とハワイ出身の歌手 Bruno Mars の「Count on Me」を歌ったのもとても印象に残っている。



レストランのロゴとメニュー

私は2週間の授業を通して、日本にいたときよりも英語がスラスラとまではいかないまでも出てくるようになったと感じた。最初は、文法を間違えてはいけないと思っていたせいで、英語を話すことへの苦手意識や抵抗感が強かった。しかし、ハワイで授業を受けたり、インターチェンジで会話したりしていく中で、大事なのは正確な文法を意識することではなく、伝えようという姿勢なのだと思った。また、自分から積極的に話して英語をたくさん使っていくことが一番大切なことだと気付かされた。今後は、バイトなどで海外の方と接するときなど様々な場面で積極的に英語を使い、コミュニケーションを取れるようにしていきたい。

植物園見学

薬学部 薬学科 2 年

今回の研修では、ハワイにある Lyon Arboretum を訪れ、現地の植物について学んだ。ガイドの説明を受けながら園内を見学したが、普段日本では見られないような熱帯植物が多く、とても新鮮な体験だった。

園内には、多種多様な植物が生息しており、それぞれに特徴や役割があることを知ることができた。特に印象に残っているのは、葉に触れ、実際に体験を通して植物の性質を学んだことである。例えば、葉をおでこに付けるとひんやりする植物があり、自然の中に温度を感じる仕組みがあることに驚いた。このように、実際に触れて体感することで、ただ見るだけでは得られない理解が深まった。

また、ガイドの説明は全て英語で行われたため、全てを完全に理解することは難しかったが、知っている単語やジェスチャーから内容を想像しながらきくことができた。普段の授業とは違い、実際の環境の中で英語を聞く経験はとても貴重であり、リスニング力の向上にも繋がったと感じている。

さらに、植物の中には薬として使われるものや、人々の生活に役立っているものもあると知り、植物と人間の関わりについて考えるきっかけとなった。将来、医療や薬学の分野に関わるうえで、自然由来の成分や植物の持つ力について理解を深めることが重要であると感じた。

今回の植物園の体験を通じて、自然の豊かさや植物の多様性を実感するとともに、実際に体験しながら学ぶことの大切さを学んだ。また、英語での説明を聞きながら理解しようとすることで、自分の語彙力の課題にも気づくことができた。



今回見学した植物園では多くの植物について二人のガイドから解説してもらったが、その中でも特に薬効や利用方法が印象に残った 4 種類の植物について紹介する。

Laua'e

Phymatosorus grossus(Polypodiaceae)

English common name:Maile-scented fern

Used to treat:

Leaves: nervousness, also used as a sedative and general tonic.

神経の緊張や不安を和らげるため、また軽い鎮静作用を目的として使われる。

しかし、一般的に言ってシダ植物を摂取するのは安全ではない。シダには、神経毒を含むものが多く、それが時間をかけて脳に蓄積する可能性がある。そのため、日常的に摂取するべきではなく、使うとしてもごく少量、あるいはできれば使用しない方が良いとされている。

薬効がある一方で、使い方を誤ると危険な植物もあることを知り、安全性について考える大切さを感じた。

Olena

Curcuma longa (Zingiberaceae)

Common name: Turmeric

Used to treat: Rhizome: sinus problems, earache, also used to purify blood

これは、風邪や副鼻腔の不調に効く飲み物として知られていて、「血を綺麗にする」とも言われている。また、抗酸化作用が非常に高く、体を守る働きがある。さらに、ハワイの人々は、ひどい切り傷やできもの、感染があるときに、強い抗菌作用をもつこの植物をすりつぶしてペースト状にし、傷口に塗っていた。皮膚を鮮やかな黄色に染めてしまう特徴があるが、普段はスパイスとして使われている。カレーが黄色いのはこれが入っているからである。ゴールデンミルクとして飲んだり、根をそのまま煮てお茶にすることも出来る。これはショウガと同じ仲間のため、見た目も少し似ている。そしてショウガと同じように、吐き気や胃の不調にも効果がある。

普段はスパイスとして食べているウコンに、薬としても多くの働きがあることを知り、とても興味深かった。



Noni

Morinda citrifolia (Rubiaceae)

Common name: Indian mulberry

Used to treat:

Fruit: boils, constipation, deep cuts, fractures head lice and used as a purgative

Leaves: tonic, skin disorders, rheumatism, deep bruises, also used as an abortifacient

Sap: kidney problems, high blood pressure, diabetes, bowel problems, some cancers

Known active ingredients:

果実には結核菌に対して効果が期待される成分や「ダムナカンタール」と呼ばれる成分が含まれ、がんの前段階となる細胞の働きやエプスタイン・バーウイルスの活性化を抑える可能性があると考えられている。

一つの植物の果実や葉、樹液など、それぞれ異なる部分が様々な用途で利用されていることに驚いた。



Ki or Lai

Cordyline fruticosa (Asparagaceae)

English common name: Ti

Used to treat:

Flowers: asthma

Leaves: dry fever, lack of perspiration, tuberculosis, backache, headache, chest congestion, boils, pimples, anxiety, also used in enemas and to promote sleep.

これは、花や葉、茎が利用されるが、特に葉がよく使われる。特に発熱しているときに使われる。木の葉を使って、例えば熱がある時に頭に乗せると、とても冷たく感じる事がわかる。そして、この冷たさはしばらく続き、これは葉から水分が蒸発し続けているためである。昔の人々は、高熱の時に体を冷やすためにこの方法を使っていた。同じ目的で使われる別の植物もある。この植物は、不安を和らげ、睡眠を促すためにも使われたとされている。また、浣腸として使われることもあったと記録されているが、それはあまり快適な方法とはいえない。浣腸であることに加えて、この植物にはシュウ酸カルシウムの結晶が多く含まれていて、これらは非常に鋭い針のような形をしていて、皮膚に強い刺激を与える。そのためこの植物の汁が粘膜に触れると非常に刺激が強く、不快感を引き起こす。それでも、このような使い方が行われることもあった。

実際に葉を額に当てて冷たさを体験したことで、植物の性質を身をもって理解でき、特に印象に残った。



町先生の講演と Kuakini 病院の見学について

薬学部 薬学科 2 年

私が町先生の講演で最も印象に残っている言葉は、「Medicine is a Science and an Art」である。講演の中で繰り返し述べられており、医療は科学的根拠に基づく「Science」の側面だけでなく、人と人とのつながりやコミュニケーションといった「Art」の側面も併せ持つものであることを示している。

近年、AI の発展により多くの仕事が代替されてきているが、その中でも人間にしかできないこととして、コミュニケーションや思いやりの重要性については大学の講義でも学んできた。しかし、それを「Art」と表現する考え方は初めてであり、非常に印象的であった。また、若い医療従事者は Science を重視する傾向がある一方で、経験を積んだ医療従事者は Art の重要性を実感するという話も興味深かった。さらに、異なる分野を学ぶ人々と関わることで多様な価値観が身につき、それらが Art を養うことに繋がるということ学んだ。

私はこれまで人見知りの性格もあり、他の人に話しかけることができず限られた人間関係の中で過ごすことが多かった。しかし今回の講演を通して、そのような姿勢では医療従事者として重要な「Art」の側面を十分に身に着けることはできないと気づかされた。そこで今後は、大学内だけでなく、アルバイトやボランティア活動などを通して積極的に他者と関わる機会を増やし、多様な価値観に触れることで自らの成長につなげていきたいと考えた。

今回の講演のテーマは「未来の世界と医療を考えよう 造ろうーアメリカの医療と教育の現状 (Let's Predict and Create Future World & Healthcare)」であった。日本では医師になるために大学で 6 年間学ぶ必要があるのに対し、アメリカでは 4 年制大学で幅広い分野を学んだ後、メディカルスクールでさらに 4 年間専門教育を受ける。この仕組みによって、医療以外の分野についても十分に学びから広い視野を身に着け、その後に専門性を深めることが可能になっている。この

ような段階的な教育制度は Science 面だけでなく、Art 面も学生のうちから養うことができるため日本でも参考にすべきであると考えた。

また、町先生の「教育は自分に返ってくるものではなく、次につなぐもの」という言葉も印象に残っている。医療は常に進歩し続ける分野であり、新しい知識を学び続ける必要があるが、その学びは自分自身のためだけではなく、将来の患者や次の世代へとつながっていくものであると理解した。

さらに、講演の中では「夢を持つこと」の大切さについても語られていた。町先生自身が多くの夢を持ち、それに向かって挑戦し続けている姿勢から、夢を持つことは自分の可能性を広げる原動力になるのだと感じた。

これまで私は、薬剤師という職業に対して具体的な目標を持たないまま、漠然と勉強に取り組んでいた。将来についても病院と薬局どちらかで働くという程度のイメージしか持っていなかった。しかし今回の講演を通して、夢や目標を具体的に持ち、それに向かって主体的に行動することの重要性を学んだ。今後は、自分がどのような医療人になりたいのかを明確にし、その実現に向けて知識の習得だけでなく、人との関りや価値観の広がりも大切にしながら成長していきたい。



見学した Kuakini 病院の前で町先生と